

## 第 89 回 みんなで作る音楽会 報告

日時：7 月 9 日 水曜日 13:15 から 16:30

場所：公民館 114 室

参加者：久我、塩路夫妻、山川恵子、岡田、松山、小林猛、天王寺谷、梶本、光長、高塚、下中、清水、庄司、安居院（記）計15 名

### 山田和樹ベルリンフィル演奏と森山良子の歌声

山田和樹のベルリンフィル指揮者デビューの様子を NHK の緊張の生中継で見ました。

後半は、少しリラックスして透明感のある歌声・森山良子を聞いてみた。知らない側面が見えた気がしました。新しい側面が垣間見えた良い番組だった。今は亡き谷村新司とのトークやデュエット、とても良かった。

#### 1. 指揮者・山田和樹が「ベルリン・フィル」デビュー！

記念すべき演奏会を現地から生中継！

13:15-14:45

インターネットの感想から；

コンマスはノア、隣は町田琴和、その隣は 2ndVn 首席のマレーネ伊藤、ノアの後ろには日本語を話せる圓・ベルクが座っていて、山田としてはやりやすい環境と言えるでしょう。



フルートのパユ様は 2 曲目の武満でソロを担当するのに、1 曲目のレスピーギも演奏しているのは偉いです。

楽団員が言っていたように、今回の公演は少しくエストラが多く、アカデミー生も含めて、見慣れないプレイヤーがいます。ベルリン州立歌劇場の楽団員も乗っています。山田はリラックスして登場し、1 曲目のレスピーギの「ローマの噴水」では第 3 部の「トレヴィの噴水」あたりからベルリンフィルのオケのうなりを作ることになっています。この曲ではパユ様が大活躍で、今日はパユ様の貢献が大きいです。ライブ前のデジタル・コンサート・ホールでも山田とパユのインタビューがありました。



2曲目は武満の「ウォーター・ドリーミング」で、レスピーギに続いて「水」がテーマになっています。パユ様は何もやっても上手いですが、和テイストな音が絶妙に出ていると思います。この曲はオケの伴奏は控えめで、完全にパユ様が主役でした。

武満の音楽の解釈は難しいですが、譜面も変わっていて、少し難解です。

標題は分かりやすいワードですが、音楽自体は抽象度が高く、とっつき難い印象がありました。

パユ様の静寂なソロと共に曲が終わり、パユ様には会場からは大きな喝采がありました。



休憩時間は山田和樹さんと町田琴和さんによる日本語インタビューでした。このインタビューは 1 日目のリハの後に行われたようです。

インタビューの要諦だけ書きますが、山田は「ベルリンを拠点にしているのに、ベルリン・フィルの知り合いの団員が少ないので、最初は緊張していたが、マイペースでやることができた」、「日本人の指揮者として武満を取り上げることは嬉しいことで、この曲はオーストラリアの先住民のアボリジニからインスピレーションを受けたもので、美しいサウンドで夢心地のようである」、「(曲目構成としては) フランス音楽を中心に『水』をキーワードを入れた美しいプログラムにすることができた」、「最初はラヴェルやドビュッシーなどを考えたが、ベルリンフィルが良く取り上げているので、ベルリンフィルが 10 年以上演奏していない『オルガン付き』にすることになった」、ヨーロッパでの辛い経験については「言葉と音楽のコミュニケーションの難しさがあったが、経験を積んだことで強くなった」、ベルリンフィルとの出会いについては「高校の時にオーケストラに興味を持って、最初に買った CD がフルトヴェングラーの『運命』、最初にベルリンを訪問したのは大学卒業後の 2002 年で、ヤンソンス指揮のブラームス 2 番を聴いた」そうです。



後半のサン＝サーンスの交響曲第 3 番「オルガン付き」では、山田はスコア無しでの指揮でした。

この交響曲は筆者の好きな交響曲トップ 3 に入っているのも、特別なこだわりがあります。

前半のソロも吹いたのに、後半も乗っている全乗りのパユ様は凄いです。かなり、山田に協力的だと思われます。



第 1 楽章ではベルリンフィルらしいゴツゴツした硬い音が出ていて、サン=サーンスらしい優美さが欠けていたのが残念な点でした。しかし、ベルリンフィルらしいスーパーカーやマシンガンのような爆音は会場で聴いている方には刺さるでしょう。また、バユ様を筆頭にしたフルートの 3 名が巧いです。オルガン奏者の S.ハインドルの白い靴が緑の照明によって靴とオルガンペダルが緑色になっていたのが気になりました。

このホールのパイプオルガンは会場の中央ではなく、上手側に設置されていて、カラヤン先生が「(サントリーホールのように) オルガンは真ん中にすべきだった」と後悔していたようです。昨年の山田指揮・モンテカルロ管来日公演による「オルガン付き」の方がサン=サーンスらしいエスプリが効いていた好演でしたが、ベルリンフィルからはもう少しソフトなサウンドが欲しかったです。第 1 楽章が終わり、拍手が出てくるのは**観光客が多い**からでしょう。日本ではここで拍手が出るのは見たことがありません。ベルリンはリベラルでダイバーシティの進んでいる都市で色んな人がいるから仕方ありません。クラシック・リテラシーの低い方も多いんです。

第 2 楽章からはベルリンフィルの機能性と曲想がフィットしてきて、やっと違和感なく聴くことができました。ベルリンフィルのプレイヤーからの名人芸が出てきて後、オルガンの荘厳な響きによって、第 2 部の開始が宣言され、山田はゆったりしたテンポで、2 人のピアノによる美しい循環主題が出していきます。ベルリンフィルの鉄壁金管部隊による壮大なファンファーレが飛び出し、弦楽セクションも集中力を増してきて、山田はリラックスした余裕のあるタクトでコーダへと導いていきます。コーダはベルリンフィルらしい超重量級でここまで重い「オルガン付き」を聴くのは初めてです。この楽章で荘厳性・壮大性はありませんでしたが、神聖性はあまり感じませんでした。これは好みが分かれるところかもしれません。



会場のブラボー喝采とスタオベは、最近のベルリンでよくあるパターンですが、楽団員が去った後、拍手の音が消えかかりましたが、かろうじてソロ・カーテンコールがありました。

今シーズンのベルリン・フィル定期では 2 人の日本人がデビューしましたが、筆者の肌感覚では、HIMARI さんのソロに軍配が上がります。彼女のアンコールの姿を見て泣けてきたからです。時差ボケもあり、疲れましたので本日はこの辺で失礼致します。本日もお読み頂きありがとうございます。(クラシック・ジャーニー：<https://ameblo.jp/classic-journey/entry-12910622163.html>)

## 2. 休憩

14:45-15:00

## 3. 地球劇場 森山良子 2014 年 05 月 10 日 放送

15:00-16:30

演奏する曲は、誰もが知る「涙そうそう」「この広い野原いっぱい」はもちろん、谷村新司とのデュエットで「いい日旅立ち」「忘れていいの」。



家族への想いが溢れる「家族写真」、そして、ファンの間で「ライブで絶対に聞きたい曲」と熱い支持を得ている「30 年を 2 時間半で…」も披露。9 分にもおよぶこの名曲は、元彼との数十年ぶりの再会を寸劇仕立てで、まるでシャンソンのような世界を繰り広げます。そして、一度は封印し、今また大切に歌い続けている「さとうきび畑」。すべて聴けるのは、この番組ならではの！

そんな 2 時間の森山良子ワールドを堪能し、谷村新司が選んだ「ANSWER SONG (返歌)」とは…？

なんと、「禁じられた恋」。



感想；

何とも懐かしい。曲を聴くだけで当時のことが思い出されます。時代を感じる曲ばかりと思いきや、最近歌っている曲も披露してくれた。「30 年を 2 時間半で…」は、楽しい曲だ。寸劇仕立てで“あるある話”が語られる。中年の女性の思いを伝えてくれる。実にうまい。役者も顔負けの演技力だ。



そして、心に響く「家族写真」  
心の中の思い出は、なくなる。  
そして思い出こそ、いとおしいものに思える。  
その思い出の源泉が家族との思い出なのだと。  
この世で築いた財産はなくなってしまうもの。  
心の中に咲かせた花は、ずっと一緒、萎まずに残っているのだ。  
もう、今では写真を整理してアルバムにすることがなくなった。  
パソコンの中のメモリーにしまい込まれてそのままになっている。  
でも、頭のどこかにそこへたどり着けるヒントは残しているはず。  
ボケるまでは、素晴らしい思い出に浸っていきましょう。

明日へ向かうほど  
近くなる昨日がある  
忘れないで思い出は  
どこにもいかない

変わらないところに  
帰ってゆける場所がある  
忘れないで ぬくもりは  
どこにもいかない

谷村新司も歌唱力抜群なので、この地球劇場はとてもよくできた音楽番組であると思う。これからも、懐かしの歌手に出合ってみたいものですね。

以上